

～研修医日記～

Vol.19 『オペ室はダンスフロア！？』 —ノリノリ研修医編—

はじめに

彼(ノリノリ研修医)は、常に根拠のない自信に満ちあふれている。オペ室の張り詰めた緊張感すら己の「ノリ」で塗り替えようとする不屈の精神(あるいは、ただ空気が読めないだけのハッピーな脳みそ)の持ち主である。

通常外科医に必要なものは「体力」と言われているが、彼は「ノリの良さ」こそが外科に必要だと信じて疑わない。この日記は、本能の赴くままにステップを踏んだ結果、オペ室の空気を氷河期へと変えた新米研修医の、ある日の記録である。

-----登場人物-----

ノリノリ研修医: 外科志望の1年目。恋愛モンスターで毎日マチアプに勤しんでいる。

シュシュチン指導医: KMCの誇る天才外科医の一人。名前の由来は自分で確かめよう！

オペ室看護師(オペ看): 新人オペ室看護師。美人で研修医の間でも人気高い。

テニス男優先輩: 飲み会にテニスラケットを持参してくる。日焼けがすごい。(日サロ疑い)

3月X日:オペ室にて

その日、彼はCV ポート埋込術の助手に指名された。気合十分な彼の横には、若くて可憐なオペ室看護師。

ノリノリ研修医:「(心の声:今日はあたりだ。ここでビシッと決めて、彼女のハートにも俺のカテーテルを留置してやるぜ!)」

シュシュチン指導医:「まずはルートの水通しが必要なんだよ。」

ノリノリ研修医:「(ニヤリ)……わかってます。何事も濡れていた方が、スムーズで“都合”がいいですからね。グフフ。」

シュシュチン指導医:「……。(完全スルー)」

オペ看:「……。(えっ、何この人、通報レベルでキモい……。)」

空気が凍り付いた。脳内では完璧な「デキる男の返し」だったはずだが、現実はかすりもせずに空振り三振。早くも1アウトである。

共同作業という名の逃走

局所麻酔薬の準備中、彼は内科ローテ時に「シリンジのケツから液体を入れてもらう特殊スタイル」を思いだし、ピストンを抜いてオペ看に突き出した。

オペ看:「……(こいつは何をしているんだ?)先生、早く吸ってください。」

ノリノリ研修医:「(しまった、外科は吸引スタイルか!)……………はい!いっぱい吸います!」

思わず口をすぼめながら言った。慣れない手つきでシリンジを引きながら、彼の妄想は絶頂を迎える。

ノリノリ研修医:「(……初めての共同作業。なんだかケーキ入刀みたいでドキドキしてきた。これが、恋……!?)」

オペ看が容器を傾け、位置を高く掲げると、彼は「彼女も俺とのフィニッシュに向かっているのか!」と勘違いし自分もシリンジを天高く掲げた。

テニス男優先輩:「アホっ! おまえは下から吸うんやぞ! 重力に逆らうな!」

これで2アウト。彼は赤面した顔と膨張した一部をマスクとガウンで隠した。

禁断のリズム

追い込まれた彼は急に(賢者タイムかのように)真面目モードに切り替わった。

バックアップに徹する俺、カッコイイ……。

自己肯定感が右肩上がりブーストした頃、オペ室にアップテンポなBGMが流れ出した。

ノリノリ研修医:「(お!俺の調子が戻ったことを察して彼女がこの曲を!?)」

シュシュチン指導医が真剣なまなざしで血管を探索する真横で、彼は軽快に腰を左右にスイングを始めた。体は正直なのである。

ノリノリ研修医:「(はっ!いかん……。踊っていたとバレれば評価がただ下がりだ……。)」

恐る恐る背後を振り返ると、そこには一部始終を眺め、冷ややかな(しかしニヤついた)目で見るとオペ看の姿があった。

ノリノリ研修医:「(……終わった。)」

これで3アウト。野球なら攻守交代だが、外科の世界に逃げ場はない。

エピローグ

その日の彼は、わずか40分の手術時間で3アウトという驚異的な記録を叩き出した。

しかし、当の本人は術後の手洗い場に辿り着く頃にはそんな失態も綺麗さっぱり忘れ去っている。持ち前の異常なまでの自己肯定感の高さで、今日もどこかで「次の曲は何か?」と新しいリズムを刻んでいることだろう。

彼がまっとうな外科医への道を歩む日は来るのであろうか。しかし、彼はそんなことは微塵も考えていない。ただ目の前のオペ室という名のダンスフロアで、本能の赴くままにステップを踏んでいるだけである。

【変集者後記】

非常に前向きな研修医である。

失敗を気にせず前に進むことはいいことではあるが、失敗から学ぶことも多くあることを叩き込まなければいけないようである………💧

いずれにせよ外科向きの気質であることだけは間違いないないないないないないようだ。



S

B

O

